

D17: 家族療法

スコア	87	年	3	4	5	6	10	11	12	15	16	16	17	17	20	21	21	21
比率	0.87	No	12	62	85	62	73	68	90	67	56	80	61	70	73	74	75	76
ランク	A	小問	all	all	all	C	all	all	all	all	all	D	all	all	all	all	all	all
			22	22	22													
			73	74	75													
			all	all	all													
H23 年度版:スコア=大問 5 点、小問 1 点の合計/比率=スコア/(試験期間(20 年)*5 点=100)→ランク:0.8 以上 A,0.3 未満 C																		
【参考資料】																		
・心理臨床大辞典:p356～360(総論)																		
*家族システム理論と代表的家族療法の各論:p1257～1272																		
・ナラティブ・セラピー入門 金剛出版																		

谷口臨床心理研究所分室:<http://www.geocities.jp/hideki280918/>

家族療法は、ひとつにはブリーフセラピーと同じ Bateson,G の理論を基盤とする部分がありますが、非常に多様な理論から始まっています。しかし、1990 年代からは、各派の境目が曖昧になっているようです。ここでは、各学派のアプローチの特徴と全体に共通する枠組みをまとめます。

なお、心理臨床大辞典の総論の部分で、おおよその理解はできますが、各論の部分を読んでおくと理解しやすいと思います。

また、ちょっと不適切かもしれませんが、H17 年から出題が見られるようになったナラティブセラピーを、ここでは家族療法の一学派として取り上げています。ナラティブセラピー/ナラティブアプローチは、家族療法の中での話ではなく、もっと大きなパラダイムの話だと認識していますが、実際には、家族療法の中で使われることが多いのが現状だと思いますので、このようにしています。

全体に、最近出題頻度が上っていて、事例問題が頻出になってきている領域です。

1.家族療法とは

家族療法とは、家族を**家族システム**^{6-62C,16-80D}とみなし、システムをクライアントのように考えて、その中で繰り返される相互作用のパターンを見つけて治療を行う心理療法です。家族システムは、有機的に結びついた幾つかの**サブシステム**から成り立つと考えられていて、家族システムの中で問題を抱えた認定された人物を **IP**^{4-62b, 10-73A}と呼び、IP の問題は、IP 個人の問題というより家族の問題が発現したものと考えます。

2.家族療法の諸理論

①ボウエン理論^{21-76A}:

Bowen,M^{5-85C,11-68C} が体系化した**家族システム論**で、治療目標を構成員の個別化と自立性の促進に置き、個人の理性機能と情緒性機能の分化が十分達成されているかを重視します。

個人が家族集団から分化しているか融合しているかを問題にし、融合している個人は不安を抱えると考えます。また、両親が不安を抱えていると、**母子共生的融合状態**が生じやすいと考えます。

②コミュニケーション学派:

ブリーフセラピーの MRI 派と同様に、Bateson,G らの**二重拘束理論**^{6-62C}の流れを汲み、家族が訴える苦痛そのものと同時に、背後に潜む相互関係の機能不全にも気づくように援助します。

③戦略学派⁵⁻⁸⁵:

コミュニケーション学派の延長線上にあつて、Haley,J^{5-85A}が中心となって築いた理論体系で、家族が現在悩んでいる問題を速やかに、かつ効果的に解決することを目的とし、Erickson,M.H に端を発する**逆説的介入法**^{5-85D}を活用するなど、独創的な戦略的技法を開発しています。

④ミラノ学派(システミック派):

Selvini-Palazzoli,Mらの学派で、Bateson,Gのシステム論的認知論を最も忠実に臨床に持ち込み、症状を家族システムの視点から理解します。心理的な問題を抱えた家族は、症状を要として家族関係の平衡を維持していて、**症状の肯定的役割**を積極的に認め、家族に対して現状維持を薦めるメッセージ(**逆説的メッセージ**)を与えることで、家族が困惑し動揺し、それが、家族交流の悪循環を壊して新たな家族システム再編を促すきっかけとなります。

⑤構造学派^{11-68, 21-76B}:

Minuchin,S^{11-68A}を中心とするグループの理論で、家族システムに療法家が溶け込む**ジョイニング joining^{22-73A}**の過程を重視し、サブシステムの境界に働きかけて構造変革を促します。特に、**母子共生的サブシステムを解体して、両親の連合関係を作り上げることが治療的に有効^{11-68D}**だと考えます。療法家の目指す家族構造は、伝統的な家族像と一致しますが、ごく最近では、多様な家族形態に応じた修正が行われています。

⑥行動学派:

行動療法を家族に持ち込むアプローチです。巧妙な指示で家族員の相互作用に働きかけ、家族機能を向上させようとするものであり、変化への意欲を促進する段階と特定の変化への教育段階が区別されています。

⑦社会的ネットワーク学派:

生態学的モデルを基盤とし、IPと感情的相互作用のある、家族以外の全ての人々との関係を総合的に考察してシステム分析し、具体的な介入戦略を立てます。

⑧ナラティブ学派(ナラティブセラピー)^{17-70, 20-73}:

White,Mらにより創始された新しいアプローチで、**社会構築主義**の発想を理論的基盤とし、家族を支配している問題のある**ストーリー**を積極的な問題解決に繋がる代替的ストーリーに書き換えることを援助します。家族療法で取り上げますが、ソーシャルワークなどでも同様の展開がされていて、全体を**ナラティブ・アプローチ**ともいいます。

社会構築主義とは、社会に存在する現実とは、すべて人々の頭の中で作り上げられたものであるとする立場であり、そのような現実というもの、絶え間なく変化していく動的な過程であり、人々が解釈し、認識するにつれて、現実そのものが再生産され则认为ます。

ナラティブセラピーはまだ流動的な部分があるように思いますが、クライアントが話す「物語」に着目し、セラピストがそれを解釈するのではなく、クライアントに寄り添って体験していくことで、その「物語」がクライアントにとって生きやすいものに変化していくといったものだと思います。このような視点は、実は、多くのセラピーにおいて既に存在しているもののように、わたしは思っています。

3.家族療法の代表的技法

①リフレーミング技法^{10-73D}:

クライアントによって経験された情緒的文脈(フレーム)を取り替えることで、ある状況に帰属していた意味を、根本的に変更することです。

問題発生の前提となっていた認知的、情緒的状況を修正すると、修正を要請された個人や家族は動揺や混乱を引き起こしますが、やがて主訴そのものが軽減し始めます。

②パドックス技法(逆説的介入法)^{10-73D}:

療法家が「私はあなたを変えようとはしません」という**逆説的メッセージ**により、家族の一人に問題に関連する行動を逆転させ、それによって、他の家族の**逆説的反応**を引き出し、家族関係の変容をもたらす方法です。

療法家が、矛盾する二つの側面をもつ関係に家族を誘い込み、期待と失望を同時に感じさせるような不安定な心理状態を家族に提供しますが、療法家自身にとっても不安定な関係をもたらします。